jam バンド公式読本



jamバンド!


jam
BAND
たま



目次



こんにちは！弦巻マキです！
この度は「Music Maker MX2 Producer Edition 特別限定版 jamバンド」をお買い上げいただきありがとうございます！
…長い製品名ですねｗｗ

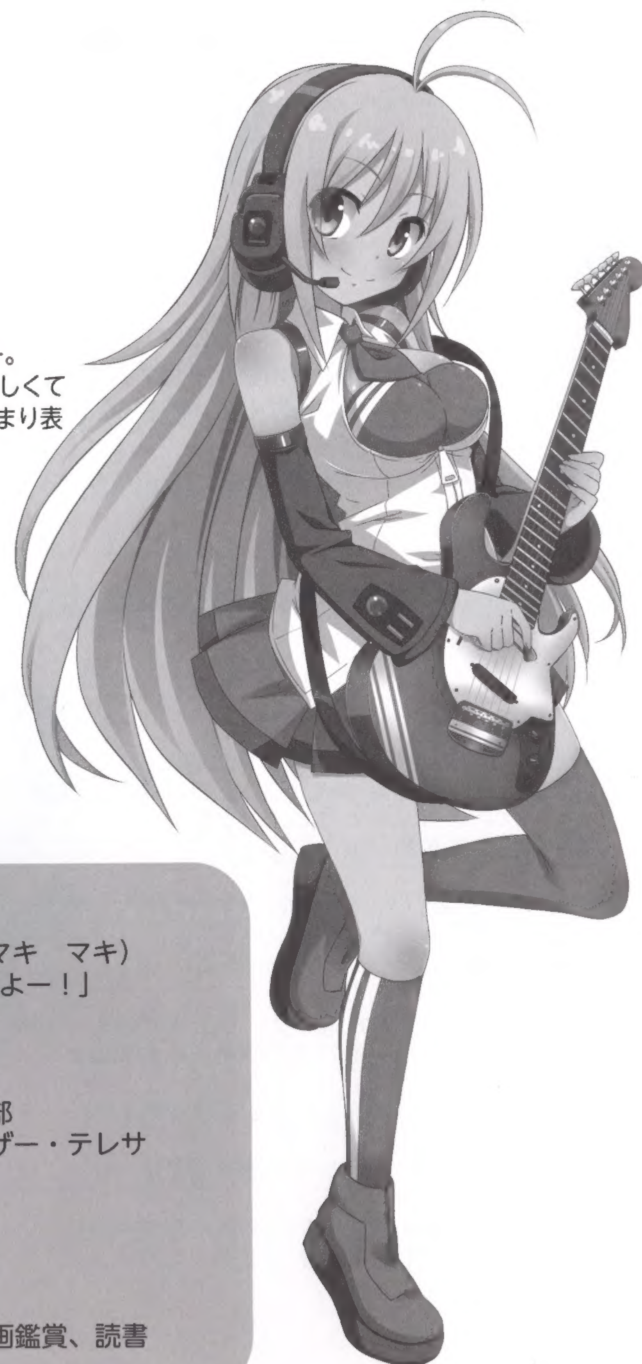
わたしたち「jamバンド」は、音楽が好きな女の子達で集まって作ったバンドです。
初登場した時は、わたし、カナちゃん、リズムちゃんの３人だけでした。
それからカノンちゃんが増えて、ロボタが増えて…今回はさらに新入生のマリーちゃんまで増えました。
そして、こんな風にちゃんとしたお話が冊子になるのは初めてです。
もう、なんていうか、いろいろと感無量です…！

マリーちゃんの加入でさらににぎやかになった「jamバンド」の日常、ぜひお楽しみください！

弦巻 マキ

Maki Tsurumaki

しっかり者の jam バンドリーダー。
後輩が 2 人もできて、内心はうれしくて仕方がないけれど、先輩なのであまり表に出さないようにしている。



楽器：Guitar
名前：弦巻　マキ（ツルマキ　マキ）
口癖：「ぎゅんぎゅん行くよー！」
好きな食べ物：ラザニア
嫌いな食べ物：なし
好きな色：赤
好きな動物：いきもの全部
好きな歴史上の人物：マザー・テレサ
苦手なもの：ダジャレ
誕生日：9 月 15 日
星座：おとめ座
血液型：A 型
愛器：むすタン
趣味：スポーツ観戦、映画鑑賞、読書

天音 カナ

Kana Amane



マリーからはライバル視されているけれど、本人は全く気づかず。
かわいい後輩だと思って接しているつもりなのに、どちらかと言うと裏目に出ることが多い。
そもそも裏目に出ていること自体に気づいていない。

楽器：Bass
名前：天音　カナ（アマネ　カナ）
口癖：「・・・了解」
好きな食べ物：うめおにぎり
嫌いな食べ物：ラ・フランス
好きな色：青
好きな動物：ノラネコ
好きな歴史上の人物：馬超
苦手なもの：因数分解
誕生日：11 月 30 日
星座：へびつかい座
血液型：B 型
愛器：スティング・ゼロ式
趣味：乗馬、武道、スタンプラリー

鼓 リズム

Rizumu Tsutsumi

jam バンドの暴走担当。
無茶も無理もするけれど、実はいろいろ考えているらしい。

楽器：Drum
名前：鼓　リズム（ツツミ　リズム）
口癖：「q あ w せ drftgy ふじこ lp」
好きな食べ物：スイーツ（笑）
嫌いな食べ物：牛乳
好きな色：ピンク
好きな動物：ハシビロコウ
好きな歴史上の人物：アルベルト・アインシュタイン
苦手なもの：おばけ（笑）
誕生日：7 月 11 日
星座：蟹座
血液型：AB 型
愛器：「星のタマ」 5 才♂
趣味：空耳さがし、自分さがし、チェス

鼓 カノン

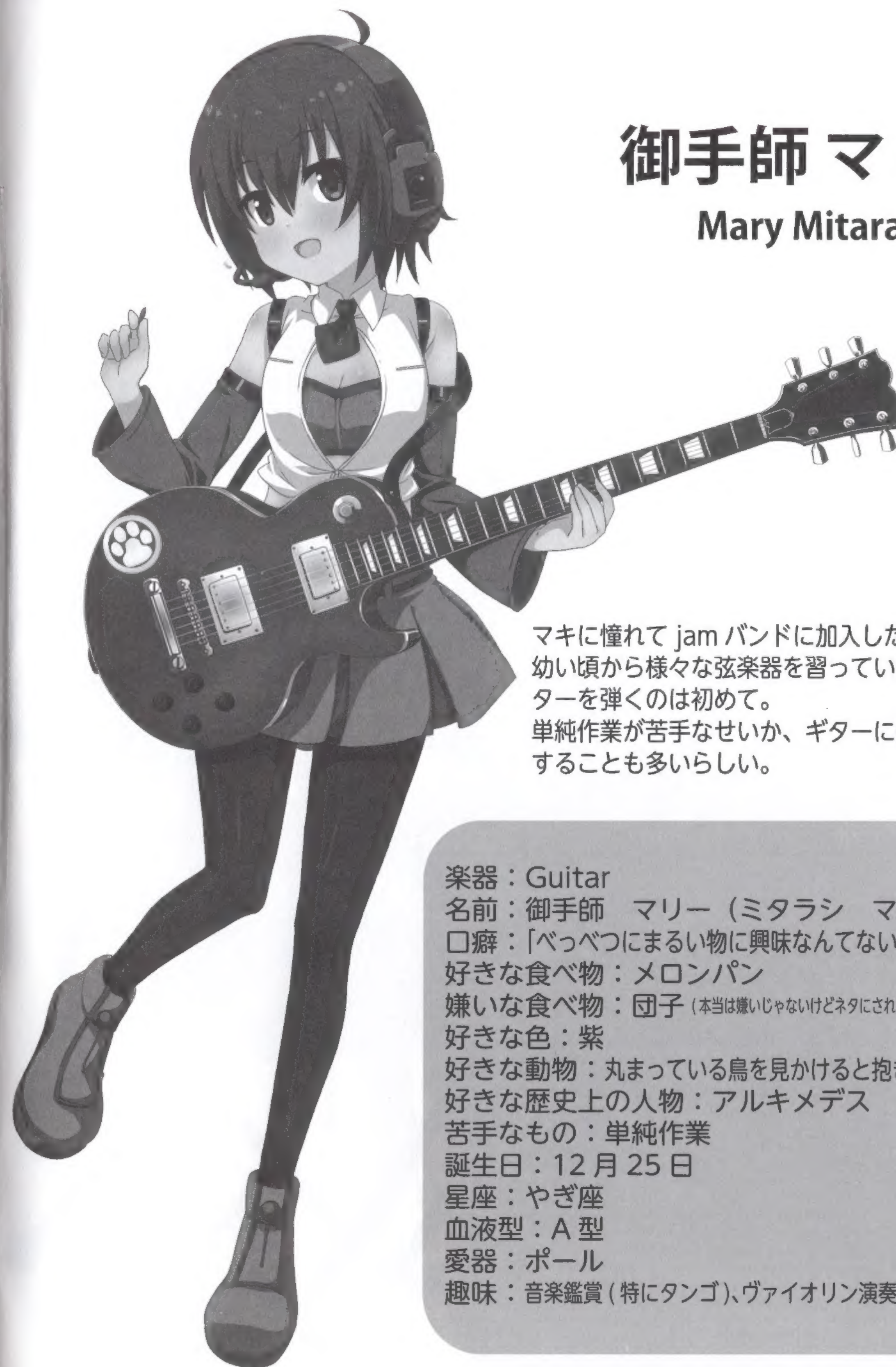
Kanon Tsutsumi

ネガティブなことを口にする癖は相変わらず。
でも jam バンドに入ったことでかなり明るくなりました。（リズム談）

楽器：keyboard
名前：鼓　カノン（ツツミ　カノン）
口癖：「どうせ私は」
好きな食べ物：たこ焼き
嫌いな食べ物：きのこ
好きな色：オレンジ
好きな動物：子犬
好きな歴史上の人物：原智恵子
苦手なもの：真夏の太陽
誕生日：11 月 7 日
星座：さそり座
血液型：AB 型
愛器：しろちゃん
趣味：ピアノ、お料理

御手師 マリー

Mary Mitarashi

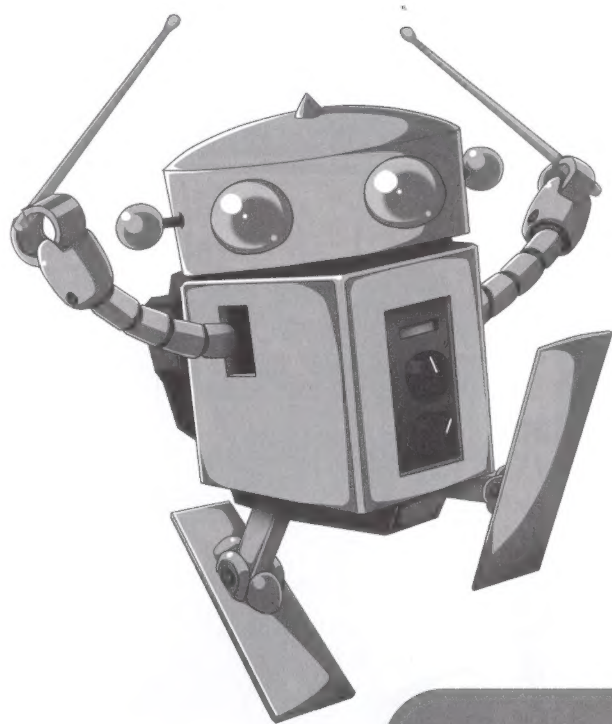


マキに憧れて jam バンドに加入した新メンバー。
幼い頃から様々な弦楽器を習っていたけれど、ギターを弾くのは初めて。
単純作業が苦手なせいか、ギターに関しては苦戦することも多いらしい。

楽器：Guitar
名前：御手師　マリー（ミタラシ　マリー）
口癖：「べっべつにまるい物に興味なんてないですから！」
好きな食べ物：メロンパン
嫌いな食べ物：団子（本当は嫌いじゃないけどネタにされるから嫌いと言っている）
好きな色：紫
好きな動物：丸まっている鳥を見かけると抱きしめたくなる
好きな歴史上の人物：アルキメデス
苦手なもの：単純作業
誕生日：12 月 25 日
星座：やぎ座
血液型：A 型
愛器：ポール
趣味：音楽鑑賞 (特にタンゴ)、ヴァイオリン演奏、お菓子作り

ロボタ

Robota



リズムの作ったロボット。
「ガガガ」という言葉しか話せないが、
リズムにはロボタの言葉がわかるらしい。

名前：ROBOTA（ロボタ）
口癖：ガガガ
機能１：ドラムスティック２本収納（背中）
機能２：「ふりかけ」常備（頭部）
機能３：椅子 (変形)
機能４：携帯ホルダー (右手)
機能５：ドリンクホルダー（左手）
機能６：スピーカー機能搭載
機能７：AM/FM 受信機能
機能８：ライト (目)
機能９：切手を貼るときに便利な水を含んだスポンジ
機能１０：キャップが無くなった油性ペンを取りあえず収納する穴
機能１１：電池チェッカー（両手）
機能１２：N システム

フリモメン jamバンド出張まんが

作 maruan

ボクっ娘には夢がある









社長よろしくお願いします









天帝の眼









最初から無理があったスマン









「ワンデイ・PV・カーニバル！」

八十助

特に用事があるわけではないけれども足が向かってしまう場所というものがある。

　校舎の長い廊下を歩きながら、すでにそこがそんな場所になっていることにマリーは驚く。まださほど時間が経っているわけでもないはずなのに。

　窓の外の青空にはちらちらと白い雲が浮かんで、文化祭の舞台で使う書割みたいな空だった。と言ってもマリーはこの学校の文化祭はまだ経験したことがないけれど。中学校の文化祭の時はこんな感じだったから、高校でも同じようなものだろうと思っている。文化祭のことを考えたのは、昨日先輩たちがそのことを話題にしていたからだ。それがなければ、また違う連想をしたかもしれない。

　部室が集まっている一角に入ると、急ににぎやかになった。運動場が近くなって、野球部やサッカー部などの掛け声も聞こえる。階上の音楽室からは吹奏楽部の演奏、体育館からはバスケットボール部のボールが床に弾む音、家庭科室からは調理器具の立てる軽やかなリズム。それらに混じって、文化系の部活の部屋からもそれぞれに個性的な音が聞こえてくる。百人一首を読み上げる声やゲーム音、ひたすらペンが紙の上を走る音、などなど枚挙にいとまない。

　そうした間を抜けて、マリーもまたとある部屋の前に立つ。

扉には大きく、『ｊａｍバンド』と書かれた張り紙が貼り付けてある。扉の向こうには人の気配があるから、すでに誰か来ているらしい。本当は、今日は音楽室が使えず演奏の練習ができないから、特に集まる必要はないのだ。それでも、なんとなく来てしまう。扉の向こうの誰かもきっとそうだろうし、これから集まってくる面々も同じような理由だと思う。変なの、とむず痒く感じながら、マリーはそれが決して嫌ではない。

　扉に手を掛ける。今日は何があるかな、とマリーは少しわくわくしている。のは、悔しいから認めたくないけれど。

　結局、マリーが来てから数分のうちにバンドのメンバーが全員揃っていた。最初に来ていたのは二年生のカノンで、次がマリー、最後に三年生のマキ、リズム、カナが三人揃って扉を開けて、

「わー、暇人ばっかだニョロ！」

　と放ったリズムの一言が的確だった。

　部室に来ると、いつもカノンがお茶を淹れてくれる。マリーは自分が一番年少だからお茶くらい淹れると主張したのだが、

「わたしこれくらいしかできないので」

　とカノンが頑として譲ってくれないのでそのまま甘んじてしまっている。緑茶だったり紅茶だったり、カノンが淹れてくれるお茶は日替わりでかわってとてもおいしい。ただ、その茶葉の出どころがカナの家からだというのが少々気にかかるところではあるけれど。カナの実家である天音家は、マリーの御手師家の長年の宿敵なのだ。もっとも、向こうは全くといっていいほど気にしていない。

今もマリーの視線にすら気づかず、ぼんやりと窓の外に目を向けて湯のみを持っている様は、女子高生にしてすでにどこかのご隠居のようだ。

　その隣ではリズムが神妙な顔をして譜面に向かって何事か書き込んでいる。さすが先輩、と感心してさり気なくのぞき込むと、奇妙奇天烈としか言いようのないアメーバ状の生物が五線譜を侵食していたので見なかったことにする。

　リズムの向かいの席では、マキがギターを抱えて難しい顔をしている。こちらは正真正銘、作曲に勤しんでいるのだ。

　マリーはその姿を恍惚として眺める。弦やピックを繰る指も、上手くメロディが浮かばないのかぎゅっと寄った細い眉根も、トントンと拍子を取るつま先も、何もかもが輝いて見える。これでギターがアンプに繋がれて音が出ていたら、たとえ気まぐれでマキが爪弾いたワンフレーズにさえマリーは歓喜して泣いていたかもしれない。その程度にはマリーはマキに心酔していた。

　そもそもこのｊａｍバンドに加入したのも、入学間もない時期に行われた部活紹介の折りに見たマキの演奏のためだった。それまでバイオリンやチェロといった弦楽器は嗜んできたものの、ギターは未経験だったマリーにとって、マキの演奏は青天の霹靂だった。親の教育方針で様々な音楽家たちの演奏を見てきたけれども、あれほどまでに心を奪われたことはなかった。その場で入部を決めた。親には反対されたけれども、それなら学校をやめると云い張ったら渋々納得してくれた。そのうちまた反対の声が上がるだろうけれど、その時はその時だと割りきって、マリーはマキの演奏に夢中になる方で忙しかった。

「う〜ん」

　眉間の皺がほぐれることなく、マキがギターを下ろす。今日は作曲は上手くいかないらしい。先日、次の文化祭に合わせて新曲を作りたいと言っていたので、その曲だろうか。マリーの視線に気付いたマキが、びくりと肩を揺らした。

「ま、マリーちゃん、もしかしてずっと見てた？」

「はい！　参考にさせていただいておりました！」

「え、な、何を？」

「マキ先輩です！」

　力一杯答えると、マキは「ど、どうも」と引きつった笑いで礼を述べる。マキ先輩にお礼なんて！　マリーは飛び上がらんばかりだったけれども、横でにやにやといやらしい笑みを浮かべているリズムが目に入って自粛した。

「な、なんですか」

「いやぁ〜、マルちゃんはほんとマキマキのことが好きニョロね」

「マルちゃんじゃないです、マリーです」

「吾輩も『リズムせんぱぁ〜い☆』ってキラキラしながらマルちゃんに見てほしいニョロ〜」

　などと言いながらクネクネと身をくねらせる。気持ちの上ではやっていても実際にはそこまでやってないしマルちゃんではないし、マリーは、し・ま・せ・ん、と断固としてはねのける。さびしいニョロ〜、と全然さびしくない顔でリズムがそらぞらしく泣き真似し、「おねえちゃん、マリーちゃんをいじめたらだめだよ！」と妹のカノンに怒られた。そしてその間もカナはひたすらぼんやりしていた。何よクールぶって、とマリーは面白くないのだが、本当にぼんやりしているだけなので実際はクールでもなんでもな

い。
　カノンに説教をされている間だけは比較的静かなリズムを横目に残りのお茶を啜っていると、マキがイスの上で伸びをしながらぼやいた。
「うーん、やっぱり上手いこと曲が浮かばないわ。何か気分転換になるようなものでもないかしら」
「気分転換、ですか」
「うん。何かいいアイディアある？　マリーちゃん」
　マキに振られ、俄然やる気を出してマリーは考えを巡らせた。何せマキからの頼み事なのである。何かないかと周囲を見回し、あっ、と声を上げた。
「部屋の掃除なんていかがでしょう」
　その視線の先には、部屋の隅にうず高く積まれたガラクタの山がある。入部して早々から気になってはいたのだが、聞いてはならない雰囲気に飲まれて何も聞けなかったのだった。しかし今回の一件は、マキの頼み事とそれを解消する、絶好のチャンスだ。
　マキはマリーの指すものに気付いて、あれか、と表情を暗くした。
「たしかにあれを片付けたら気分転換にはなるわね……」
「す、すいません、あれそんなにマズい代物だったんですか」
　あまりにマキの顔が暗いので思わずたじろぐ。
「いやマズいっていうか、たぶんものすごく面倒くさくなるというか」
「そもそも何なんです、あれ」
「リズムちゃんの持ち込んだガラクタ」
「ああ……」
　大方そんなところであろうとは思っていたけれど、実際に言葉にされると重みが違う。今も部屋の隅でガタガタ動いているロボットがいるのだが、ロボタはリズムの作ったものなのだ。おそらくそれに類するものがあの中に埋まっているのだろうと思うと、たしかに悩みの種かもしれない。びっくり箱的な意味で。
　それなら他の気分転換を考えねばと再び頭を抱えるマリーに、いいよ、とマキは笑って立ち上がった。
「どのみちやらなきゃいけないことだし、どうせなら今やっちゃうわ」
「い、いいんですか」
「まぁ何とかなるでしょ。いいよね、リズムちゃん？」
　一応持ち主に確認を取る。ようやく妹の説教が終わって一息ついていたリズムは、もちろんニョロ、盛大にやってニョロ！　と自分は全く片付ける気のないコメントを返してきた。はいはい、と苦笑いしてマキが制服の袖をまくる。
「ぼ、ぼくも手伝います！」
「いいの？　助かるけど……、鬼が出るか蛇が出るか、何が出てくるかわからないわよ？」
　たかが部室の掃除で大げさな、と一笑に付せないところが問題だ。
「大丈夫です！　たぶん！」
　流石に鬼と蛇は出ないだろうと踏んで、マリーも袖をまくる。
「がんばってニョロ！　応援するニョロ！」
　高みの見物を決め込んでいるリズムに、
「何言ってるの、おねえちゃんも片付けなきゃダメでしょ！　誰のせいだと思ってるの！」
　とすかさずカノンが腕を引いて掃除に参加させる。

　もちろん自分も掃除するつもりでかっぽう着を着けている姿は、本当に血の繋がった姉妹だろうかと目を疑いたくなるほどの天使ぶりだ。
「………」
　無言でカナも椅子を引いて立ち上がった。どうやらこちらも掃除に参加する気十分のようだ。天音家には負けてられない、と妙な闘争心を燃やすマリーを他所に、じゃあみんなでお掃除だね、と楽しくなってきたらしいマキがうきうきと言う。
「全く意味がわからないのはリズムちゃんに聞いて。あとは各自の判断で捨てちゃっていいわ」
「……ガ●プラ」
「ガン●ラは捨てちゃダメニョロ！　俺の拳が光って唸るニョロ！　お前を倒せと轟き叫ぶニョロ！」
「………じゃあ、ガ●プラは取っておいて」
「……了解」
　様々なモノアイ系ロボ、さらに一体どこに隠れていたのかわからないけれどもプラモデル化されていないはずの某プロレス系シリーズのキットまで掘り出し、カナはひとつひとつ別の棚に丁寧に並べていく。黙って作業しているが、たまにじいっと見入っているものを見る限り、モノアイ系に肩入れしているように思われる。
　マキはゴミ袋を手に、悪即斬と言わんばかりにテキパキと容赦なくその中へガラクタを放り込んでいく。時々まだひくひくと動いているロボットがいないでもないが、情けを見せたら負けよ！　と最初に言い放った言葉に違わずマキの手は非情であった。マリーはそんなマキの真摯な横顔に見とれた。思わず、ぼくもマキ先輩に断捨離されたい！と胸の内で叫んだが特に深い意味はない。
　カノンもマキほどではないが、割りきってゴミ袋に詰め込んでいた。それでも根が優しいカノンは、捨てられるロボの残骸を目にして涙を溜め込んでいた。そしてここまでガラクタを溜め込んだ元凶のリズムは、バランスボールに乗ってごろごろしていた。
「形あるもの必ず滅する……平家物語の真髄ニョロ！　素晴らしいニョロ！」
「だから誰のせいだと思ってるの、おねえちゃん。……少し頭冷やそうか？」
「ひいいい、悪魔だニョロ！　白い悪魔だニョロ！」
　器用にバランスボールに乗ったまま転がって距離を取ったリズムが、そうだ、と迫り来るカノンにガラクタ山から拾い上げたものを突き出す。
「抵抗してもムダなんだから、おねえちゃんもおとなしく片付けしなさぁい！」
「ち、違うニョロ！　これを見るニョロ！」
「え？　これって……」
　リズムの手にあるものを認めたカノンが、毒気を抜かれたようにきょとんとしてそれを見つめた。それはカノンがｊａｍバンドに加入して間もない頃に、皆で遊びに行った先の遊園地で贈ったキーホルダーだった。恐ろしく不細工な割に妙に陽気な顔とポーズをしているクマのキーホルダー。
　当時、自由奔放なリズムに似ず生真面目過ぎるくらい生真面目なカノンは才能あふれる姉に対する引け目もあって、なかなかマキやカナに対して打ち解けられず、どことなくぎくしゃくしていた。その距離をなくしたい、とマキが企

画した遊園地だったのだが、それでもなかなか硬い態度はほぐれず、どうしたものかと頭を悩ませていたところ、一体どこから見つけてきたのかこのキーホルダーをカナが持ってきて、カノンにプレゼントしたのだった。
「流石にその不細工なのはない……！」
　とマキとリズム共に止めようとしたが間に合わず、ハラハラしながら受け取ったカノンを見守っていると、一体何が琴線に触れたのか、それはそれは心から喜んでくれた。そしてこの一件以降、硬い態度は和らぎ、二人にも自然に接するようになった。
　そんな思い出深いキーホルダーだけれども、しばらくの間は大事に鞄にさげていたのだが、いつしかチェーンが緩んで取れてしまい、思い当たるところを探しまわっても見当たらず、なくしてしまったと思って落ち込んでいた。それが今リズムの手にあって、カノンは思わず見入ってしまう。
「これ……ほんとにあの時の……？」
「当たり前ニョロ！　おねえちゃんが先日見つけ出したんだニョロ！」
「おねえちゃん……！」
　ありがとう、と姉に抱きついて喜びを表現したカノンが、見てくださいカナさん、と黙々と片付けているカナのところへキーホルダーが見つかったことを伝えに行く。なくした時のカノンの狼狽えぶりを知っているカナは、「……良かった」と言葉少なながらもめずらしく微笑んで、キーホルダーの発掘を祝った。
「いい話ですねえ……っ」
　横で事情を聞いたマリーも思わず涙ぐんでしまったが、話した当人のマキは複雑だった。なぜならあのキーホルダーは、カノンがあまりに落胆しているので、こっそりリズムが記憶を頼りに作り直した複製なのである。それを知っているのはリズム本人以外ではマキとカナだけだ。カノンの叱咤の矛先を見事にそらして一息ついているリズムの姿を見ると若干複雑だが、無邪気に喜んでいるカノンの顔を見たら、それを指摘するのも野暮で、まぁいいか、とマキは肩をすくめた。ただしリズムには後で灸を据えておくのは忘れない。
　しかしひとつ思い出話が始まると、つい手が止まりがちになった。これは何に使ったんですか、とマリーがマキに訊ねたのは、百円ショップで見かけた勢いで買った卓球のネットとラケットのセット、皆でお泊り会をした時にマキが何故か披露する羽目になった手品の用具一式など、説明する度にその時のことを思い出して懐かしい。いや懐かしいばかりでもない。
「どうして卓球を……？」
「テレビで……ちょうど世界大会があって……リズムちゃんが王者狙おうって言い出したから……」
「手品は……？」
「エスパー・弦巻目指そうよ、名前似てるのいるし！　って言われて……」
「パクリじゃないですか！」
　などなど話は尽きず、そうして大体騒ぎの元凶がリズムにあることを知って、マリーの中ではいよいよリズムが要注意人物となっていったが、マキはのほほんと笑って「まぁリズムちゃんのおかげで毎日が刺激的だよ」などと言うので気勢が削がれた。というより、のほほんと笑うマキに女

神的美しさを見出してそれどころではなかった。おお、なぜ世の芸術家たちはこの美しき先輩を絵画や彫刻で讃えようとしないのか！　と理不尽な怒りを覚えるレベルだった。
　そして次々とガラクタを取り出してはマリーはマキに話をねだった。片付けの邪魔をしているという自覚はあったが、自分の知らない先輩たちの話は興味深くて、つい訊ねてしまう。たった一年の差ではあるけれども、いろいろな思い出を積み重ねてきたマキたちが羨ましく、また少しのさびしさも感じた。三年生のマキたちは今年で卒業してしまうのだ。一年生の自分はたった一年しかいっしょにいられないのだと思うと、少しでも多くその話を聞きたいと思ってしまう。
「えっと……、じゃあこれは？」
　マリーが次にガラクタ山から拾い出したのはビデオカメラだった。ボタンが側面にいくつも付いて見るからにハイスペックな仕様に思われるが、まだほとんど使われた形跡のない新品同様の状態だ。マキも見覚えがないらしく、なんだろう、と首を傾げている。
「ビデオなんか撮った記憶ないけどなぁ。ねえカナちゃん、こんなのあったっけ？」
「……知らない」
「だよねえ」
　首を振るカナにうなずき、それならとリズムの方を見やれば、良いことを思いついたという笑みを浮かべていて、思わずマリーの背に汗が流れた。
「思い出したニョロ！　そのためにわざわざ放送部から新品をかっぱらってきたんだニョロ！」
「今の問題発言は聞かなかったことにして訊ねるけど、何のために？」
「それは良い質問だニョロ、マキマキちゃん！　そのビデオカメラで、ワレワレのＰＶを撮ろうと思っていたんだニョロ！」
「ＰＶ！？」
　リズムを除いた全員が声を揃えて驚く。そうニョロ、とリズムがドヤ顔でビデオカメラを構えた。
「我々のバンド活動に足りないものは何か？　それはＰＲ活動ニョロ！　だからＰＶを撮って、我々のバンド魂を世界に見せつけてやるのだ！　……ニョロ！」
　なんと大げさな、とマリーは呆れ顔で話を振ろうと隣のマキを見やり、ぎょっとした。
「すごいわリズムちゃん……！　それよ！　まさしくその通りよ！　断固として必要ね、ＰＶ！」
「流石マキマキちゃん、理解が早くてありがたいニョロ！」
　ガシイッ、とどこかの栄養ドリンクの宣伝にでもなりそうな熱い握手を交わし合い、マキがリズムに同調する。マキの顔は希望に輝き、あまりの眩しさにマリーの目はつぶれそうなほどであった。
「えー」
　その一方でカノンは姉の発案というだけで嫌な予感しかしなくて気が乗らず、カナはいつものぼんやり顔で、賛成のつもりかパチパチと気の抜けた拍手を送っている。マリーはマキが賛成のようなので賛成だった。つまり多数決にするならＰＶ撮影決定である。ただし、一つ気になる点があってマリーは手を上げた。
「はい、質問です！」
「どうぞ、マルちゃん！」

「マリーです！　ＰＶ撮るとして、誰がカメラマンや監督を務めるんですか？」
訊いた瞬間、にやりとリズムが笑ったので、マリーは青ざめた。カノンも同様に、まさか、と唇を震わせる。
「それはもちろん、この鼓リズム総監督ニョロ！」
「やっぱり！」
「は、反対です！　絶対反対です！」
カノンが握り拳を作って反対を表明し、同様にリズム監督の危険性を憂慮したマリーもカノンと並んで反対した。
「マキ先輩がいいと思います！」
冷静に考えて、普段から皆をまとめる立場にあるマキが見たいからなどという一心で言ったわけではない。決して。適任だろうと推薦してみる。
しかしこれには当の本人が、気弱に辞退した。
「いやぁ、わたし監督とかはちょっと……」
「な、何でですかぁ」
「撮影なんてしたことないもん。リズムちゃんの方が詳しそうだし、きっと面白いの撮ってくれるよ」
とリズムに振るのでマリーも納得しかけたが、カノンだけは未だに徹底抗戦の構えを崩さなかった。
「おねえちゃんじゃ危険すぎます！」
「何てこと言うんだノンちゃん！　姉を信じるニョロ」
「信じたいけど……難しい……っ！」
「そりゃそうかもね」
「マキちゃんまで納得しちゃやダメニョロ！　うー、考えてみるニョロ、一体そのカメラの操作方法をわたし以外にわかる人がいるニョロ？」
「う……」
「それに我が手にはすでに脚本まで完成されているのだニョロ。今この場で誰が適任か、考えるまでもなくわかるニョロ？」
「うう……っ。お、おねえちゃん、です……」
がくり、とうなだれながらカノンが敗北を認める。じゃあ決定ね、とマキが言ってなんとなく皆で拍手する。リズムはやあやあと鷹揚に手を上げて、
「それじゃあ早速撮影に入るニョロ！」
と宣言した。いつの間にか手にはメガホンを握り、頭にはキャップ、顔にはサングラスを掛けてどこから見ても監督としか言い様がない出で立ちに変わっている。ご丁寧に腕には『総監督』の腕章付きである。
「……何の曲の……ＰＶ……？」
その傍らですでにレフ板を構える姿が様になっているカナが訊ねた。
『Ｓｔｒａｗｂｅｒｒｙ Ｊａｍ』ニョロ！」
分厚い台本を振りかざしてリズムが言う。あ、あの曲好き、とマキは目を輝かせ、あの曲ぅ、とカノンは死んだ魚の目をしている。まだｊａｍバンドのオリジナル曲をほとんど知らないマリーはカノンに、どんな曲なんですか、と耳打ちすると、カノンは机の上に積んであった紙束の中からそっと一枚を抜いて無言でマリーに差し出した。歌詞が載っているらしい。
「ありがとうございます！」
頭を下げて、わくわくと紙面に目を走らせる。歌詞はこうだった。

『Ｓｔｒａｗｂｅｒｒｙ Ｊａｍ』

ベリー、Ｖｅｒｙ、ペリー、　開国
ベリー、Ｖｅｒｙ、ペリー、　開国

いつまでもストロベリー・ジャムで喜んでる子供だと思わないでよ
ほろ苦いマーマレード・ジャムを紅茶に入れていただくわ
（いただきマングース！）

ブルーベリージャムをヨーグルトに入れて、
北極熊のことを考えると・・・
なぜだか涙が止まらない（ドンストップ！ドンストップ！）

ストロベリー、ブルーベリー、ラズベリー、ペリー、　開国
ストロベリー、ブルーベリー、ラズベリー、ペリー、　開国

たまには甘いストロベリージャムもいいけど、
某組織と某機関の身内に対する甘さだけはいただけないわ
（いただけナイチンゲール！）

ラズベリージャムを舐めるのも大好きだけど、
どちらかというとなめられてるの～
（バカじゃないの～）

ベリー、Ｖｅｒｙ、ペリー、　開国
ベリー、Ｖｅｒｙ、ペリー、　開国
かにチャーハン！

「ふぉう……」
溜息とも何ともつかぬ吐息がマリーの口から洩れた。
「ね、素敵な曲でしょ？」
横から歌詞をのぞき込んでいたマキがうっとりと言い、こくりとカナがうなずく。カノンだけがトーストにいちごジャムをのせようとして間違えて瓶の中にパンを突っ込んだような顔をしていて、どちらかといえばマリーもカノンに同意だった。
一体この歌詞でどんなＰＶを作り上げようというのであろうか。曲も聞かせてもらったが、よくこの歌詞にこのメロディを思いついたものだと唸らされた。
外野が期待と不安に揺れまくっている間、とり急ぎ小物を作ると言って机に向かっていたリズムが、できた、と高らかに手にあるものを掲げた。
「さあみんな、まずはこれを顔に付けて前奏を始めるニョロ！」
「…………」
それはまさしくペリーであった。嘉永六年（一八五三年）に、アメリカ合衆国からはるばる浦賀へいらしたマシュー・ペリー代将その人であった。そのご尊顔がお面になっているのである。まるで写真かと思うような素晴らしい筆致であった。こういうのを才能の無駄遣いというんだろうな、とマリーは極めて冷静に考えた。
ちなみにリズムの用意したのはそれだけに限らず、マングースとホッキョクグマを描いた立て看板らしきものまである。これまたミレーとピカソの融合かと思うような素晴らしい筆使いであった。マリーは訳も分からず涙があふれそうだった。カノンはすでに泣いていた。

リズムはビデオカメラを立てて、机を隅に寄せると、簡易な舞台をセットした。撮影の準備は万端である。マキとカナはそれぞれに楽器を構え、

「さぁ二人とも！」

と尻込みするカノンとマリーを呼んだ。もちろん顔はペリーだ。棒立ちしてペリーのお面をつけたカナがベンベンとアンプに繋がないベースを弾いている様は、シュールとしか言いようがない。服は制服のままである。

「マリーちゃん助けて……現実から連れ出して……！」

「それはぼくがお願いしたいですカノン先輩」

ガクガク震えているカノンを叱咤して、ままよとマリーは相棒のレスポールを肩に掛けた。もうこうなればなるようになるしかない。第一崇拝しているマキは張り切って腕を振り回し、ウィンド・ミル奏法まで披露している。乗り遅れるわけにはいかないのである。

「装着！」

ついに観念してマリーもペリーの面を着けた。意外に視界が広くて、演奏の邪魔にはならないので感心した。カノンもペリーの面をつけてキーボードの前に立ったが、目の部分から滂沱の涙がこぼれていてカナとは違った意味でシュールだった。

「みんな完璧ニョロ！　じゃあ行くニョロ！」

リズムもコンサート中のアイドルの如く早着替えを済まして監督スタイルからペリーに切り替えるとドラムの前に座った。カンカンカン、とスティックを打ち鳴らして拍子を取る。

曲自体はラジカセから流れているので、曲に合わせてそれらしいアクションをとればいい。完成した時には別録りの音声をかぶせるという寸法だ。マリーは一度も演奏したことのない曲だけれども、さっきひと通り聞いたので楽譜はすぐに頭に浮かんだ。幼い頃からあらゆる弦楽器を嗜んできた賜物だ。

しかしいきなり目の前にふらりと進み出たカナが歯ギターならぬ歯ベースをはじめた時には硬直しかけた。マキはマキでウィンド・ミルの後にギターを振り回しながら弾くという荒技まで見せつけた。リズムはスティックをくるくる回しながらドラムを叩いている。

唖然としながらカノンを見れば、自棄になったのかものすごい勢いで頭を振りたくっていた。じきに手を身体の前で交差させ、エーックス！と叫び出しそうなノリだ。もちろんそこまで激しい曲ではない。このままでは自分も何か芸を要求されるのでは、という嫌な予感ははたして的中して、Bメロを前にリズムが叫んだ。

「さあマルちゃんも！　アクション！」

「マリーです！」

そこだけは忘れずに訂正して、ソロパートが来ると正面に出たマリーは、思い切って先日マキに借りた某バンドのライブ映像で見た技をやってみた。

ここだ、というところですかさずギターを背中に回すのだ。しかも演奏の手は止めない。

「おおお！」

「せ、背中弾きだ……！」

リズムとマキの賛辞のわきではカナが演奏の合間に器用に拍手をしてくれている。もっと派手に褒め称えなさいよ！

とカナに対して憤慨する一方、もはや脇目もふらずに頭を振り立てて現実逃避に勤しむカノンの姿も目に入って涙

ぐましい。

「よしカーット！　いいよいいよぉ、みんないいよぉ！ニョロぉ！」

曲が終わり、テンションの上がったリズムが叫ぶ。つつがなく撮影が終わってホッとしたのもつかの間、

「じゃあ次の撮影行こうかニョロ！」

とリズムが続けたので、えっと思わずマリーは聞き返した。

「これで終わりじゃないんですか！？」

「何言ってるニョロ！　この演奏の合間合間に効果的なシーンを挟み込むのが肝要なのだニョロ！」

「こ、効果的……？」

一体何を持って効果とするのかが問題だが、早くもリズムはマキとカナにマングースとホッキョクグマを持たせて部室を出ていこうとしている。慌てて自分も追おうとして、まだ頭を振っているカノンに気付いてマリーは強くその手を引いた。

「カノン先輩、目を覚ましてください！　これから別の場所で撮影ですよ！」

「え…っ！？　ま、まだ続くの…？」

我に返ったカノンに切々と涙のにじむ声で訴えられ、リズムはよく意味のわからない効果よりも妹を救うことにその頭脳を活かしていただきたいと思ったが、そもそも問題がリズム自身だった。マリーはとっさの機転で言葉を飲み込み、がんばりましょう、と無難な言葉でカノンを部室から連れ出した。しかしこのままでは自分の理性もショート寸前な危険性をはらんでいる。

何とか迅速に撮影を終えねば、と決意を新たにするマリーだったが、問題は量より質だった。

「さぁ次はここで撮るニョロ！」

とリズムがいつの間にやら職員室で借りてきた鍵で開けた扉は家庭科室のものだった。何故ここで、という疑問が顔に出たらしく、リズムがしたり顔で言った。

「わたしは食べることが好きニョロ」

「はあ」

「だから家庭科室なわけニョロ」

「それだけですか！？」

「あったり前田のクラッカーニョロ〜」

えっへんとリズムが無い胸をめいっぱいそらせ、同じく胸のないマリーは無駄に胸の痛みを覚えた。

「撮影……どうするの……？」

訝ねるカナの小脇にはホッキョクグマがいる。ちなみにカナはよほど気に入ったのかどうか、未だに頭にペリーのお面を着けているので、ペリーがホッキョクグマを拉致している現場に見えなくもない。マキも頭の側面にペリーを貼り付けたままマングースを抱えている。チーム・ペリーに改名した方がいいかもしれない。

同じくペリーを後頭部に貼り付けたリズムがさらりと持参の紅茶を淹れ、その横にこれまた持ち込んだジャムの瓶を置いた。歌詞にある通りのストロベリーとマーマレードだ、と思いきや何故かブルーベリーだった。

「何で！？」

「だって部室にこれしかなかったんだから仕方ないニョロ。低予算の宿命ニョロ」

神よ許し給え、とジャムの神に頭を下げたリズムが、マキにマングースを配置するように指示する。

「その荒ぶるマングースが我々のバンド魂の表出なのだニョロ！」
「オッケー！　出でよマングース！」
「……マングースの、御成り～」
　三年生トリオは何か薬でもキメたのかというテンションでマングースを崇めながら、ビデオカメラを回して撮影を進めていく。
　唖然としながらもマリーがマキのキメ顔をスマホで隠し撮りしたり、カノンがエクトプラズムを宙に漂わせている間にマングースの撮影は終わり、次いでホッキョクグマが立ち上がった。
「さて、次はホッキョクグマだね！」
「ホッキョクグマといえば～ニョロ～？」
「……冷蔵庫？」
「ハイ正解！　カナちゃんに座布団十枚ニョロ！」
「……どうも」
　依然として三年生トリオは独特のテンションで、冷蔵庫の前に据えた立て看板のホッキョクグマを動かし、マリーからすれば相当に正体不明な動画を撮った。一体これがあの演奏動画のどこに入る余地があるのであろう。
「さ、ノンちゃんとマルちゃんも入って入って！」
　と五人でホッキョクグマを中心に組体操をやらされた時には、まさになぜだか涙が止まらないのはカノンに他ならなかったに違いない。
「最後は屋上ニョロ！」
「屋上って入れるんですか？」
「入れるかどうかは問題じゃない、入るかどうかニョロ！」
「それ不法侵入じゃ……っ！？」

「問題ないニョロ、鍵は持ってるニョロ」
「そこ問題じゃないですよね！？」
「鍵がなかったら壊して入らなきゃいけないけど、あるから何事もなく入れる。問題ないわ」
「その通りだニョロ！」
　マキが真顔で言うので納得しかけたが、しばらく経って我に返るとやはり問題だろうと思った。思ったが、その時にはすでに三年生トリオに手を引かれて屋上に出た後だった。
　暗い階段を登りきるとぱっと光があふれて、一瞬視界が利かなくなる。思わず目を閉じたまぶたを恐る恐る開けると、見たこともないくらい遥かに高く青空が広がっていた。
「わあ……っ！」
　三年生も屋上には初めて上がったようで、感嘆の声がそこかしこで上がる。ずっと思考放棄していたカノンも我に返って、すごい、とはしゃいだ声を上げた。
「風がきもちいいね、マリーちゃん！」
「はい！」
　撮影が始まって以来この短い時間のうちに数えきれないほどの苦難に見舞われたカノンの心労を思えば余りある。この素晴らしい青空や爽やかな風に、少しでもカノンの心が癒やされるようマリーは祈った。
　だが神は非情であった。
「さぁ最後の締めだよ！」
　マキの声に振り向いた三人は、その場で氷のごとく固まった。そこには三人のナイチンゲールがおわしましましていたのだ。
「そ、それ、は……」

「いただけナイチンゲール」
　歌詞を歌うように読み上げたマキが、さあ、と二人の手にもナイチンゲールのお面をのせた。ペリー（お面）だけだとばかり思っていたら、恐るべしリズムの手はナイチンゲール（お面）まで作り上げていたのだった。
「マリーちゃん……わたし…もうダメかも……」
「か、カノン先輩！　諦めたらそこで試合終了ですよ！」
　はらはらと涙を流すカノンはゆっくりと首を振り、そうだね、と力なくナイチンゲールのお面をかぶった。クリミアの天使と呼ばれたナイチンゲールはカノンにこそ似つかわしいとマリーは思うのであったが、無念なるかな、天使の涙はカナとフュージョンごっこをしているリズムには届かないのであった。
「じゃあ撮るニョロ～。みんなそれぞれにいただけないポーズをするニョロ！　……はい！　完璧ニョロ！」
　ビデオカメラの電源を切って、リズムが親指を上げた。
「これならアカデミー賞まちがいないニョロ！」
「ＰＶでも取れるんだっけ？」
「さあ、聞いたことないですけど……」
「おねえちゃん、また嘘ばっかり言ってるでしょ！」
　カノンに追い回されるリズムが放り出したビデオカメラをカナが上手いこと受け止めて、しばらく考えていたかと思うと不意に顔を上げてマキに言った。
「編集……うちでやる、から……」
「いいの？」
「……機械、揃ってる、から。……リズムと、編集、する」
「ああ、そっか。放送部よりもカナちゃん家の方がいい機材揃ってそうだし。じゃあ、お願いしちゃっていいかな？」

「……任せて」
　こくりとうなずくカナを、マリーは悔しげににらむ。先に自分がやると言えばよかった。そうすればマキの後光が差さんばかり微笑みを向けてもらえたのは自分だったのに、と思うと出遅れた自分が歯がゆくてならない。バカバカバカ、ぼくのバカ！
　マリーの視線に気づいたカナが、不思議そうに首を傾げた。
「……どうか、した？　……マリーも、うち、くる？」
「い・き・ま・せ・ん」
「……残念」
　心底残念そうなカナの表情に一瞬罪悪感が湧き上がったが、いや天音家は敵！　と己に言い聞かせた。先日も株の売買で上手いこと天音家の当主に言いくるめられたせいで危うく大損をしかけたのだ。そんな輩の娘に同情は不要。よし、と気合を入れ直したマリーだが、実際はカナの父のアドバイスに逆らって株の変動を見誤ったマリーの父親がでっち上げた嘘だということは気付く由もない。
「それにしても、最後のシーンってわざわざ屋上で撮る必要あったのかな……？」
　ナイチンゲールして終わっただけであった気がして誰にともなく呟くと、あるニョロ、と息切れしたカノンを撒いたリズムがにゅっと下から顔を出した。
「わあっ！？」
「それはだねえ、マルちゃん。屋上って青春って感じがするからニョロ！」
「え、あのＰＶに青春とか関係あるんですか……」
「当たり前ニョロ！　女子高生バンドと言えば青春！青春と

いえば学校の屋上！　これは切っても切り離せない萌えの方程式ニョロ！」

「も、もえ……？」

ダメだこの先輩早く何とかしないと。と、この時マリーは強く思ったが、いきなり閉めていた屋上への扉が開いたので死ぬほどびっくりして跳び上がった。

「こら！　なんか騒がしいと思ったらまたお前か、鼓（姉）！」

「げえっ！？　な、なんで先生こんなとこに……っ」

「屋上に人影があるって通報があったんじゃい！　ほら、こっち来い！　職員室で詳しい話聞くからな！」

「うえええええ」

「なんだ、弦巻と天音もいるじゃないか。お前らもっとこの問題児に首輪つけておけよ」

「すいません、狂犬で……」

「まさかのマキちゃん裏切りニョロ！？」

「なにがニョロじゃい。おらおら、残りの子たちもはよ校舎の中に戻りなさい。責任は全部鼓のせいでいいから」

「ひどい！」

「何がひどいだ、どうせ主犯はお前だろ」

「ぐうの音も出ません」

パワフルと名高い担任の女教師に引きずられるように職員室へ連行されていったリズムを見送り、残った一行はぞろぞろと部室へ戻った。

マングースとホッキョクグマを引き連れたベリーとナイチンゲールの一行は、先に引きずられていったリズムの騒ぎもあってか、校内でかなりの注目を浴び、もうお嫁にいけないとカノンに新たな涙を流させた。

「もうこうなったら、浦賀に来航するかクリミアへ行くしか……」

「落ち着いてくださいカノン先輩！　最悪の場合、ぼくが養いますから！」

「マリーちゃあん……！」

ぎゅっと抱きしめられ、カノンの豊かな胸部に圧迫されて呼吸が苦しい。

「おお、百合だね」

「……百合」

和気あいあいとリズムのように妙なことを口走っている先輩二人に余計に意識が遠のきかけたが、部室に戻った際こそりとマキに耳打ちされた言葉に、マリーは舞い上がった。

「ありがとね。こういうPVなんて初めて撮ったからめちゃくちゃだったと思うけど、楽しかったよ」

小一時間ほど後、こってりと担任に油をしぼられて帰ってきたリズムの反省文を、一応共同責任ということで皆で考えて、その日は解散となった。

そして後日。

普段から実験だの何だので徹夜の多いリズムはともかく、珍しくカナまで目の下に色濃くクマを作って登校してきた。その理由は、放課後の部室で明らかになった。

「さぁさぁ皆の衆、刮目せよ！　PVの完成披露会ニョロ！」

テープを手にリズムが誇らしげに宣言する。おおーっ、と残る三人で拍手して、

「それでリズムちゃんもカナちゃんも徹夜してきたの？」

「……集中、してた」

「すごいですねカナさん、編集機材使えるなんて！」

「……じいに、助けて、もらった、から」

「じいのスペックはすごいニョロ！　吾輩でも敵わなかったニョロ！」

「天才少女のおねえちゃんが敵わないなんて……」

「じい、おそろしや！」

元々謎めいた存在であった天音家のじいの謎がさらに深まり、マキとカノンが絶句する。御手師家にも執事はいるが、それほどのハイスペックではないのでマリーはむかっ腹を抑えて聞いていた。次に執事を募集する時は映画監督くらいできる者にしよう、と密かに決意する。

「さて、それじゃ早速見るニョロ！」

窓のカーテンを閉め、部屋の照明を落とす。一メートル先もおぼつかないほどの暗闇が訪れた、と思うとスクリーン代わりにした正面のホワイトボードにぽっと光が灯る。その長方形な光の中に、ｊａｍバンド、Ｓｔｒａｗｂｅｒｒｙ Ｊａｍ、と黒板に殴り書きされた文字が踊った。

「すごーい！　本物のPVみたい！」

「ふふふ、感動するのはこれからニョロ！」

リズムの不敵な言葉とともに、PV本編が始まった。見慣れた、この部室で撮ったあの演奏シーンだ。

「わ、すごいすごい！」

「かっこいい！　え、でもこれわたし……？」

マキとカノンの歓声および愕然とする声が錯綜する中、マリーはひたすら画面に見入っていた。あの時はふざけているとばかり思っていたけれど、改めてこうして見るとマキのテクニックはやはりマリーよりもずっとずっと頭抜けて卓越していた。マキだけじゃなくて、リズムもカノンも、認めるのは癪だけれどカナも、自分より遥かに巧い。

そして決定的なのは表情だった。緊張で固まっている自分に比べて、他の四人は実に楽しそうだった。たったそれだけのことかもしれなかったけれど、たったそれだけのことでもマリーは自分がまだまだだと思った。痛感した。悔しかった。

ああ、早く。とマリーは思った。早くぼくもこの人たちに追い付きたい！

「マキ先輩！」

感情が高ぶったあまり思わず声が出た矢先、ドーン、と光が弾けてマリーは固まった。マキとカノンも目を丸くしている。

画面はちょうど家庭科室で撮影したマングースのフレーズのくだりだった。そこで画面に入った演出が、とてもじゃないけれど素人ができる代物ではなかったのだ。

「な、何あれ！？」

「……天音家特製、CG」

「特製とかってレベルじゃなかったですよ！？」

「まさか3Dとかないよね！？」

「おおっとマキちゃん鋭いニョロ！　さあ、このメガネを掛けるニョロ！」

「うわあ……」

気が遠くなりつつも、律儀に3Dメガネを掛ける。そしてまた三人揃って、

「うわあ……」

と声を洩らした。

最後にかにチャーハンがどんと画面いっぱいに出て、PVは終わった。ぱっと照明がついて、ふんぞり返ったリズムが高らかに笑う。

「ふははは、どうニョロ！　この力作！」
「ごめん、リズムちゃん……これ……文化祭に提出とかしにくい……」
「ナ、ナズェナンデス！？」
「おねえちゃん、カナさん……これじゃどこのハリウッド映画かってレベルだよ……全米が泣くよ」
「しかもマングースとホッキョクグマなんか動いてたじゃないですか……凝り過ぎです……」
「……マルちゃんからも、ダメ出し」
「マリーです！」
　思わずいつものノリで訂正すると、うれしげにカナが微笑んだ。ついやってしまった、とマリーは顔を赤くしてそっぽを向いたが、なぜだか、今までほどの嫌悪は感じなかった。
　一人悲嘆に暮れているのはリズムだ。
「だ、ダメってことはないニョロ！？　これでＰＲ活動できるニョロ！？」
「だってこれどうやって作ったか先生たちに説明しづらいよ、リズムちゃん」
「低予算じゃなくなってるもん」
「こ、凝り過ぎたのが裏目に出たか……っ！」
　打ちひしがれて涙をこぼすリズムの頭を、ぽんぽんと撫でてカナが慰める。どうやら元のデータに上書きしてしまって、今更戻すことはできないらしい。
　それらのやりとりを背後から見ていたマリーは、思いついたことを口にしようかどうか迷った。言えば、またあのしっちゃかめっちゃかなことになるのは明らかだ。でも。それならそれで、楽しもうと思っている自分がいるのも事実だった。カノンはまたエクトプラズムが抜けてしまうかもしれないけれど、それなら自分がいくらでも励まそう。三年生トリオが暴走する可能性も多分にあるけれど、そうなったらその時だ。
　マリーは深く息を吸い込むと、皆さん、と呼びかけた。
「じゃあ、もう一度ＰＶ撮りましょう！」
　一瞬の間の後、ｊａｍバンドの部室には「おーっ！」という歓声と、一部の悲鳴が、高らかに響き渡った。







jamバンド！

大体いつもこんなかんじ。

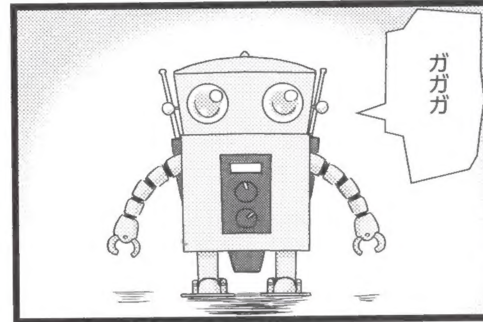


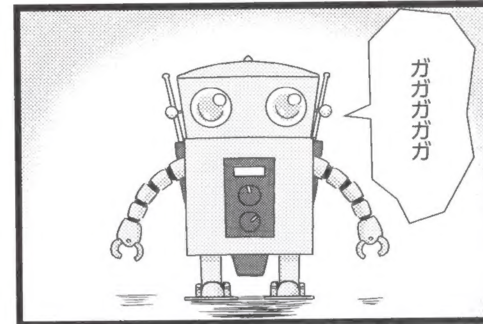


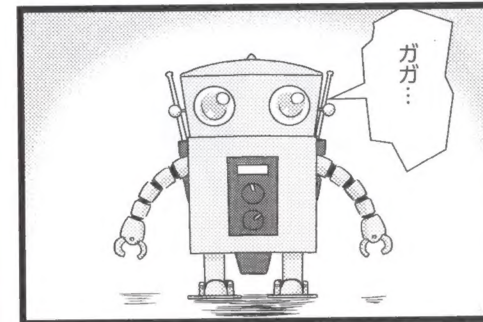


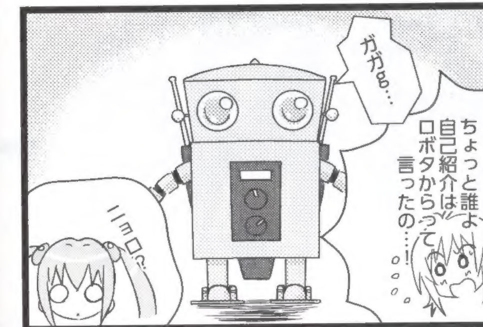


ガガガガガガガガガガガg









ちゃんとやってますよ。





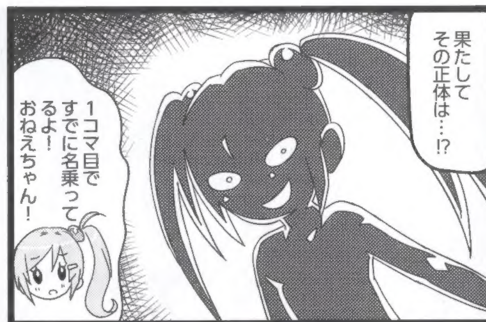


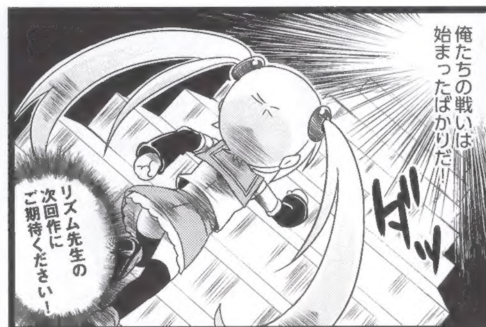


第一部・完









妹＞姉









not みたらし









ぎゅんぎゅんいきます。



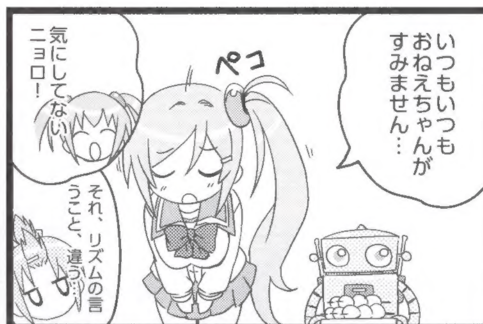






大団円？









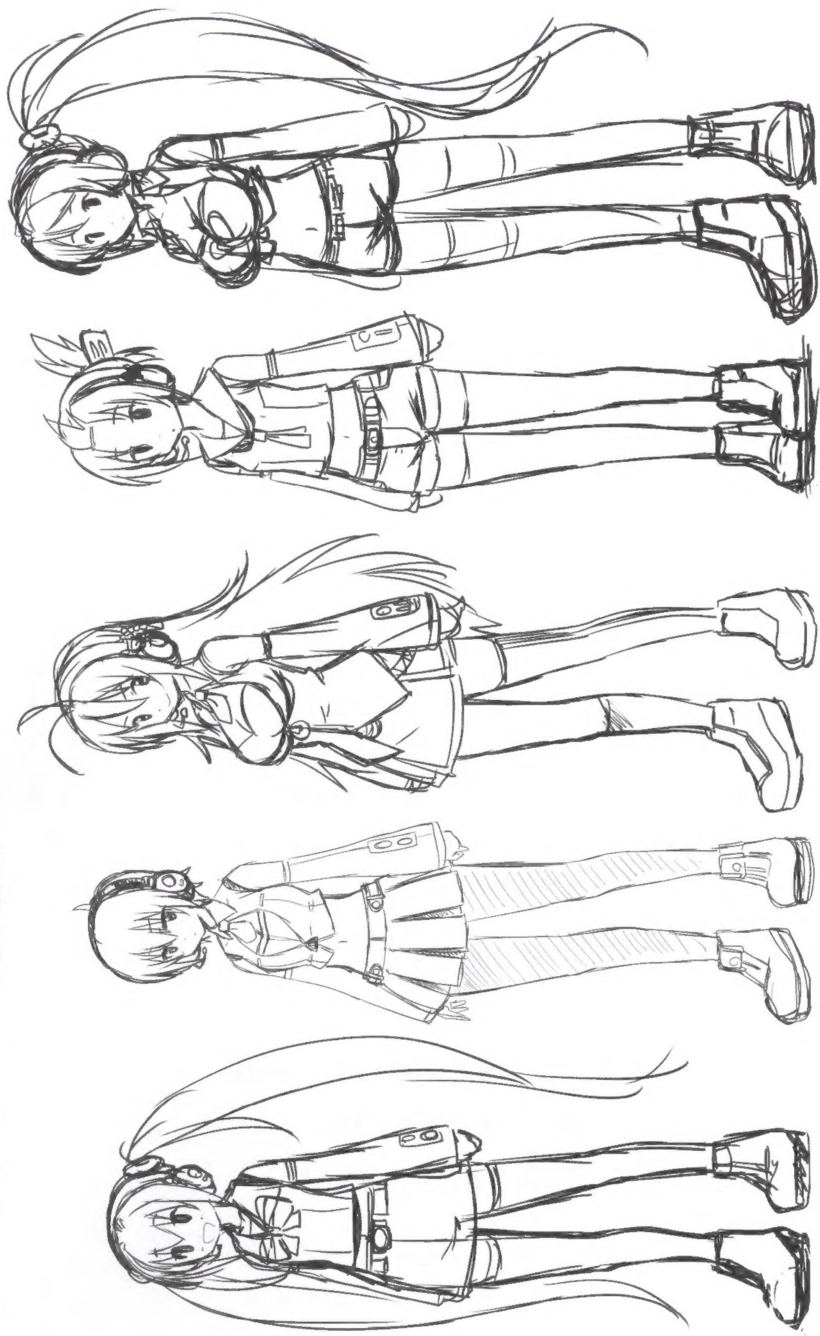
これからも jam バンドをよろしくね！

御手師マリー（ラフ画）

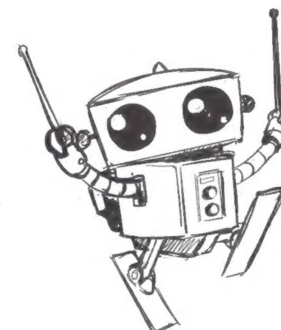


梅谷先生から一番最初に出てきたラフ画です。
ツリ目でちょっと小柄な子、というイメージです。照れ屋っぽい表情がかわいらしいですね。

jamバンドメンバー対比図



jamバンドメンバーの身長を確認するための対比図です。
新キャラのマリーはリズムより少しだけ大きいくらいの身長です。



jamバンド!

奥付

発行年月日：2013年12月19日

発行：株式会社AHS

印刷：栄光印刷様

何かありましたらAH-Software WEBサイトまで

http://www.ah-soft.com/